

# 自悠新聞

〒980-6101

仙台市青葉区中央1-3-1 アエル1階

発行所 丸善仙台出版サービスセンター

平成21年(2009年)9月 No.79

印刷 笹氣出版印刷(株)

☎022-264-0151 fax022-264-0112

[k.ishimori@nifty.com](mailto:k.ishimori@nifty.com)

編集長 石森浩一

連載  
第1回

## 第16回東京国際ブックフェア基調講演

東京大学大学院情報学環教授 姜尚中氏

今夏開催された第16回東京国際ブックフェアでの基調講演、姜尚中東京大学大学院教授の講演要旨を報告いたします。

### 姜尚中先生基調講演

『「悩む力」で「現代の古典」を発掘する』

現在、本が売れない「出版不況」の時代といわれていますが、この出版不況状況を私は『TBS現象』と呼んでいます。TBSは本業の放送事業の不調を何とか副業つまり不動産事業でカバーしようとした。しかしそれもうまくいかず、やればやるほど深みに落ち込むという結果になりました。出版産業もこうした深みにはまっているように思いますが、この出版不況があと3年も続くと、映像



姜尚中先生

文字産業界の中には倒産する企業が多く出てくるのではないかと危惧しています。

さて、私の著書『悩む力』は80万部を越すベストセラーとなりましたが、実は何故売れたのか私も分からないのです。しかし、以前に出した岩波現代文庫『マックス・ウェーバー研究』が3刷までいき、多くの読者に支持されています。どうしてこのようなクラシックが今読まれるようになったのでしょうか。

一九八〇年、九〇年代は、「新しいものを求めた」時代でした。PARCO現象といわれる「消費が個性を開花させる」と考えられた時代でした。「消費」することで個性が生まれてくると信じられていたのです。しかし、一九九〇年代にバブルがはじきました。これにより、

本当の意味で「熱い近代」が終焉を迎えたのです。即ち、どんどん新しいものを求めていた時代は終わったのです。この二十一世紀は「新しく出るべき

ものは全て出てしまった時代」ですから、これからは「リサイクル」の時代なのです。

さて、こんな時代状況の中で「出版界」はどうなっていくのでしょうか。

私は「本」にも時代に対応する本の種類があると思っています。つまり、本の種類で書き手も書き方を変えるのです。私の著書もテレビで紹介されると売れるようになります。

湾岸戦争の頃から、新聞とテレビの関係が逆転しました。以前は文字に威厳がありました。今はテレビに文字情報がついていくという関係になったのです。ですから私は、文字メディアと映像メディアが両生類のように両立出来ないものかと思っています。お互いにシナジー効果を発揮できないかと考えています。新しいものが出尽くしてしまった今世紀であるからこそ、読者は「古典」に帰ってきているのです。新しい「生もの」と

古い「干物」、言ってみれば一夜干しのような「干物」が「古典」なので「古典」がリサイクルで蘇るのです。「古典」に大胆に新しい光を当ててみると、若い人たちが古典に親しむようになるのではないのでしょうか。「古典」という素材はあるのですから、その素材をどのように料理していくのか、だと思えます。

例えば、「古典」を廉価本で出版する、現代の言葉で再編集するなど、味付けに工夫をしていくのです。こうして今こそ「社会科学」の時代をきっちり作っていかねばなりません。永江朗氏が書いた『ベストセラーだけが本である』は、出版界は、たくさんの人に読まれるように工夫をしるという永井さん独特の出版界への激励であると思えます。出版界の方々は活字離れを慨嘆するだけではダメです。目下の利益だけにとらわれてはなりません。TBSのような負の連鎖をおこしてはダメなのです。しっかりと中身作りをしていくべきです。(裏へ続く)

### M マルエム春秋

二人目の孫、翔太が8月10日に生まれました。兄優太とは5歳ちがいであります。難産だった5年前と違って、「すりり」と出てきた親孝行者である。「政権交代」の、世の中が変わって

いくかもしれない時代に生を受けた。経済不況、そして閉塞感漂うこの時代を、優太、翔太は果たしてどのように生きていくのだろうか。我々団塊の世代は高度成長の時代であって先行きが明るく感じられた。生活は貧しくても、毎日が希望に満ちていた。それに比べて優太、翔太の時代は苦しい時代になっていくような気がしてならない。出来得ることならば苦勞なく一生を過ごしてもらいたいと思うが苦勞は必至である。だからこそ最近思うことは、これから長い人生をおくっていく人たちに、我々人生の終盤を迎えた者たちが何をしてあげられるかということである。将来を担う孫たちの世代の住む社会が少しでもよいものになるよう努力しようと思う。今日この頃である。

即ちコンテンツを作る人がいなければなりません。昔は個人と世界の問題がリンクしていましたが、今は個人が何をしても何も変わらないという無力感が充満してしまっています。そんな無力感があるから、本も読まなくなつたのです。そんな状況の中で私が出版界に求めるものは次のことです。

まず第一は、先ほど述べた「クラシックリサイクルネットサンス」です。古典を様々な味付け、調理をして提供することです。新しく作られるものがなくなつたこの二十一世紀は「古典」こそ読者が求めているもので、この古典を様々な工夫をしてリサイクルするので、第二には学術的な書籍でも一般の人にも読んでもらえるような工夫をすることです。それにはメデアミックスという手段も必要です。優秀なエディター、つまり編集者が必要なのです。その編集者が今後重要な役割を担っていくことになるでしょう。編集者は、書き手がどんな包丁を使い、どんな台所で調理していくのかを見極め、書

き手の味付け場所を的確に提供していくという大切な役割を担うのです。第三には、ハウツーものは、ハウツーモノに徹して出版することです。読み棄てられる本であっても、生活の知恵を一つか二つは伝えてくれるでしょう。そうした本も必要なのです。そんな役割があれば「棄てられる本」でもよいのではないのでしょうか。

このように出版はいくつかのすみ分けをされながら生き残っていくしかないと思います。そしてその書き手も積極的に「本の為に」動くことです。例えば、書き手がなるべくサイン会などで直接読者と接する機会を多く持つようにする、つまり読者に対してさまざまな働き掛けをすることです。私自身もサイン会などで読者の方々に私の本を手渡す時、この本を書いて本当に良かったという気持ちになります。また、書店の店員さんたちも大事な存在であると思います。店員さんたちは「本を読んでもらう為に」、そして「購入してもらう為」

に創意工夫を日頃からしています。この創意工夫をしていくとする意欲を啓発していくのも書き手の役割の一つであると思っています。このように今、出版業界は、書き手、出版社、書店、取次などみんなが総力戦で戦つていかなければならない時だと思っています。

出版業界は今まさに「焼け野原」に立っている状況です。この2、3年が勝負です。一九六〇年代は二度と来ないので、ただ漫然と出版しているだけでは出版界は立ち直ることは出来ません。そして出版界は「ロングセラー」が持続出来る経営こそが必要であると思います。

最後に私が考えている「古典」のリサイクル法を紹介して講演を終えたいと思います。

- ① 古典を廉価版で出版する。(例・文庫判)
  - ② 独断でもいいので、それにエッセイを付ける。
  - ③ 現代に伝えていけるような息吹を与える。
- 以上で私の講演を終わります。

## チャリティー丸善・絵画特選展

後援：財団法人 日本ユニセフ協会 宮城県支部

● 平成21年9月25日(金)～10月1日(木)

● 丸善仙台アエル店1Fギャラリー

20世紀を代表する国内外の巨匠の油彩や水彩から、リトグラフ、シルクスクリーン、銅版画など幅広いラインナップで約200点を一同に集め、特別奉仕価格にてご提供いたします。是非この機会をお見逃しなく。

出品予定作家(順不同・敬称略)

有元利夫、片岡球子、平山郁夫、東山魁夷、棟方志功、奥村土牛、小倉遊亀、中島千波、千住博、荻原高德、東郷青児、織田広喜、熊谷守一、長谷川潔、畦地梅太郎、村上隆、アイズビリ、シャロワ、ローランサン、シャガール、ミロ、ユトリロ、ビュッフェ、カシニョール、カトラン、ガントナー、ワイズバッシュ、ボナフェ 他多数出品予定

\*売上金の一部は財団法人 日本ユニセフ協会 宮城県支部に寄付させていただきます。



営業時間  
10:00～21:00

日曜祝日は20:00迄

### 丸善仙台アエル店 丸善の自費出版

あなたの本を創ってみませんか！

丸善は書店としての経験をいかして自費出版本制作のお手伝いをさせていただきます。お気軽にご相談下さい。随時承っております。

☎022-264-0151 携帯 090-5184-0532 (石森)



認定第0014号  
石森浩一